

石井進先生を偲ぶ

大三輪 龍彦



昨年10月、石井先生の急逝の報に接してから、既に4ヵ月が過ぎようとしている。いまだに先生とのお別れが信じられないし、また信じたくない思いで一杯である。スーツにリュックサックを背負って、手に茶色の鞆を提げて、にこやかに微笑みながら、深々とお辞儀をなさる先生にはもうお会いできないのだろうか。

先生とお別れしてから間もなく、女性民俗学者の大藤ゆき氏が亡くなった。その葬儀の席で、やはり民俗学者の鎌田久子さんから、大民俗学者柳田国男先生のお宅で出会った中学生の話を受けた。その中学生は、柳田先生の指導を受けながら民話の研究を続け、レポートをまとめて学会誌に掲載されたということである。だれであろう石井先生の若き日の姿であった。おそらく、先生が初めて興味を抱いた学問が民俗学だったのだろう。石井先生の学問の原点なのかもしれ

ない。

私が大学で歴史学を学ぶようになって、先生の御業績やお名前については存じ上げていたが、なかなかお目にかかる機会はなかった。やっとお目にかかれたのは、昭和50年代になってからのことである。横浜にある有隣堂では『有隣』という月刊誌を発行しているが、その中に毎回座談会が掲載されていて、その一つとするために石井先生と作家の永井路子さん、それに私を加えて「発掘遺跡が証言する中世鎌倉の新事実」について、鼎談をし、『有隣』紙上に掲載された。この時が先生と親しくお話をさせていただいた初めである。ところが、その翌年に当たる昭和54年11月に発行された『三浦古文化』第26号誌上に「中世都市鎌倉研究のために、一大三輪龍彦氏の近業によせて一」を発表され、わざわざ掲載誌までお送りいただいた。その中で先生はその鼎談をきっかけに「こうして私はあらためて中世の鎌倉を見直してみる気持になったのであるが、そこで気がついたのは文献史学の成果と歴史考古学の成果がまだ十分につきあわせられておらず、最近の発掘成果や大三輪氏の見解が文献史家の間で必ずしも広く知られていないということであった。」とっておられる。私の業績はともかく先生は文献史学だけではなく、歴史考古学をも含めた広い視点で、中世都市鎌倉の研究に取り組むべきであることを提言されたのであった。まさに石井史学をよく示している。

文献史学と歴史考古学とだけでなく、先生の学問の原点であった民俗学はもちろん、自然科学をも含むあらゆる学問分野が先生の視野には捉えられていたに違いない。学際的というより、先生の存在そのものが学際そのものであったといえよう。亡くなられた後で中央公論社から出版された著書『中世のかたち』がそれをよく物語っている。文化財学もまさに学際である。先生を失ったことは文化財学科と学会にとって痛恨の極みである。

ふところ深き歴史学 ——石井進先生を偲ぶ——

関 幸 彦

石井先生の蔵書の量には驚かされた。石神井の御自宅には収まり切れず、近所にマンションを借りられ、そこにも多くの書物が置かれていた。その数は万単位の蔵書と記憶している。ご家族より鶴見大学に寄贈いただける旨の御連絡を得て、伺った折に急ぎ調べたものだ。分野の広さは歴史学にとどまらず、民俗学や国文学その他社会科学系の諸分野にわたっていた。主なきその部屋には「知の巨人」の痕跡が漂っているようでもあった。

享年70歳はいかにもまだ若い。そして惜しい。まだまだやり残された仕事があったにちがいない。先生が鶴見大学の文化財学科に着任されたのは、平成11年4月のことだった。前年の文化財学科設立にともない客員教授としてお迎えさせて頂いた。筆者は石井先生より1年早く着任していた関係で、同じ中世の分野ということもあり、先生の着任を本当に心待ちにしていたものだった。以前から学会その他で2、3度お会いしたり、拙論や拙著を送り御返事を頂いたりするなどの関係はあったものの、直接に親しく接する機会がなかっただけに、喜びも大きかった。着任1年目、ゼミの御担当もなく、講義終了時には、ほぼ毎回のように“胃袋の結合”で楽しい時間を共有させて頂いた。

そんな折りに、先生が半ば冗談まじりに、奥様から『鶴見に行ってあなたは随分とお酒の量が増えたわね』と言われましたよ』と語られたことがあった。そこで「じゃ今日はヤメにしますか?」と言ったところ、「いやいや、少しだけなら平気ですよ」と。これまた気軽におつき合い頂いたことも幾度かあった。電車の中でも学問の話から学生諸君の様子のことなど話題はつきることはなかった。

さきごろ、先生の最後のお仕事ともいえるべき『中世のかたち』が刊行された。中央公論新社の「日本の中世」シリーズ(全12巻)の第1巻にあたるものだ。中世考古学や民俗学を統合した壮大なスケールの内容が語られており、実証に裏打ちされた豊かな知見が随所にあふれている。法制・制度史を出発点とされた先生の研究の成

果が、円熟味を加え、隣接の学問諸分野と共鳴し合いながら、みごとなハーモニーを創り上げた作品でもある。それはまさに『中世のかたち』の表題を裏切らない作品のようだ。あの膨大な蔵書に裏打ちされた、ふところの深さを感じざるをえなかった。

先生はここ数年、鶴見大学の担当授業のなかで、明治・大正期の史家黒板勝美について話されていたが、文化財保護法とのかかわりで、黒板の史学について議論を広げられていた。名著『国史之研究』をひもとけばわかるように、その学問的裾野の広さは瞠目に値する。「国史」(日本史)の枠組みを創ることで、大きな役割を演じた黒板の仕事は、時代区分論の方法をはじめ種々の場面で「通説」の形成に寄与することとなった。

石井先生のお仕事は、その黒板史学に対比し得る要素を持っていたと思われる。学問的土壌においては同一ではないが、“総合化”への試みという点では、共通するものがあつたと思われる。

新しいレベルからの歴史学の“総合化”を目ざしたまとめが、『中世のかたち』だったのかもしれない。早すぎ、そして急ぎすぎる逝去は、歴史学会にもそしてこの鶴見大学の文化財学科としても、あまりに惜しい。

「ついにゆく道とはかねて聞きしかど、
きのうきょうとはおもはざりしを」

——在原業平——



思い出

石井靖子

進が死去してから早くも3ヵ月余り経ち、生活もだんだん落ち着いてまいりました。いつも帰ってくると、玄関わきに迎えにきた犬と戯れる声を聞いて、私は迎えに出たものですが、その声も聞けなくなり淋しくなりました。思いもかけなかった突然死を経験し、その後、あちらこちらで突然死の話のを伺うと意外とあり、先日は有名なデザイナーの方が路上で倒れていらっやったという記事を見ましたが、どうしたらこの様なことを防ぐことができるのか、と考える毎日です。私達も歳を取ったので、それなりに食事に注意し、健康診断もうけて健康に留意していたつもりでした。ハードワークだったのだろうか、フランスにいかなかったらこのようなことは起こらなかつたらうか、など、今更考えてもしかたがないことをやはり思います。

結婚生活ちょうど40年で思いもかけず、あっさりと永遠の別れをしてしまいました。

振り返ってみますと、家庭では言ってみれば、自由放任でそれぞれ好きなことをすれば良いと言う感じでした。子供は特別な教育はせず普通で良いと云い、英才教育や塾に行くことは望みませんでした。それぞれ子供は自分の選んだ道に進んだわけですが、内心は誰か歴史をやらなかなと云う気持ちがあつたわけではないようでした。亡くなってから聞いたことですが、冗談に、ある子が歴史をやるうかなと言つたら大変喜んだそうです。

でも家族では歴史のおもしろさや、魅力など全くといってよいほど、自分からは話さない人でした。しかし子供が小さい時にはまだ暇があつたので、休日にはよく一家で近くの石神井公園に出かけ四季折々の自然の美しさを満喫し、石神井城址をみたり三宝寺に参つたり、道端の庚申塚やお地藏様などを拝んだりしました。あるお正月には、川越に出かけ、城址や、昔ながらの町並みを見学したりしたこともありますが、これらは自然に歴史の面白さを子供たちに感じ取らせようと心がけたからではないかと思ひます。

進は何かあると、まず関係ある本を買い求めて知識を得ることが常でした。ある時小さな庭ができ、少し枝を切らなくてはと云うと、まず、庭木の手入れの本を買ってきていろいろ講釈をしましたが、実際に行なつたのは1、2回で、終わりでした。また私がキャッサバ(澱粉の一種)に関する仕事をすると云いますと、分野は異なつておりましたが、「キャッサバ文化と粉粥餅文化」と云う本を借りてきてくれました。とにかく本には大変関心があり、詳しい人でした。古書展は大好きで、忙しいと古書目録を見ながら食事をし、嬉々とし

て出かけ、翌日にはダンボール一杯の本が届くという具合でした。一部改築した時に設けた書庫は、これなら大丈夫と私が思つたのも束の間ですぐ一杯になり、どの部屋にも進関係の本がおかれる状態でした。昨年の夏、下肢静脈瘤の手術をすることになりますと、早速それに関する本を入手して知識を得ておりました。今も棚にあるその本をみますと、両足に包帯をぐるぐるに巻いてあの夏の暑さに耐え、弾性ソックスを履いて痛がつていたことを思い出します。

育ちのせいもあり、忙しいのに、寸暇を惜しんで、小説、詩、俳句、短歌などを読み、最近短歌にこつて大西民子を愛読し、評伝なども数冊求め楽しんでいました。

将棋も好きでしたが忙しく、たまにテレビの将棋をみるくらいでしたが、米長邦雄のさわやか流が気に入つていたようでした。新劇、歌舞伎などにも関心があり、若い時には時々観にいきました。

何時からか忙しくなり、家に居る時は、いつも二階の書斎の机の前に座り、仕事に専念する生活になりました。子供も大きくなると、夫々勝手な時間に帰宅するなど、一家団欒の時間も少なくなりましたが、休みの日などに久しぶりに一家が揃うと、夕食に一本あけようといつて皆でワインや、日本酒を飲むのが楽しみでした。

進は学んだ歴史が戦争ですつかり変わつてしまつたことが、日本史を学ぶ動機になつたと聞いています。日本中世法制史を専攻し、更に、地方史の編纂、棚田や景観の保存、北海道の上ノ国勝山館遺蹟、青森の十三湊遺蹟の発掘や保存、大分県の国東半島の「田染の荘 莊園の里」の保存などにも尽力しました。70才では日本人の平均寿命にも達せず、せめてもう5年でも長生きしてくれらつたと思うのですが、何とも叶わない話です。

鶴見大学の先生方、事務関係の方々、学生のみなさま、生前には大変お世話になりました。拙い言葉でございすが心より御礼申し上げます。



他の学問分野との共同によって通説批判の道を拓く

——石井進先生の思い出——

福田豊彦

石井進先生の思い出はつきない。二人だけでゆっくりお話した最初は、1968年の大学紛争の最中、歴研大会で札幌から上京した折、会場から抜け出してお茶の水の「ジロー」で過ごした時であつたろう。日ごろの温顔と異なる深い憂い顔は、今も忘れられない。

私が東京工業大学に勤めをかね、'73年に人物叢書『千葉常胤』を書く時、先生は『史学雑誌』に紹介の筆をとって下さり、その中で国文学の山下宏明氏の説を紹介されて、『源平闘諍録』への配慮を求められた。同書は鎌倉時代の末に成立した平家物語の一異本であるが、お恥ずかしいことに当時の私はまだ書名も知らなかった。早速に調べると、同書には頼朝拳兵に関わる独自の千葉氏の伝承が収録され、その成立に房総の守護千葉一族がかかわっていたことも推察できた。そこで、当時着実に進められていた赤松俊秀氏の「平家物語の原本の研究」の方法に導かれながら、平家諸本の中での同書の位置づけと、収録された説話の史実性を考える作業に手を付けた。以後30年、ようやく講談社学術文庫の一冊としてまとめ、お元気な先生のお手元へお届けできたのは、せめてものことと考えている。

'81年に岩波新書『平将門の乱』を書いた頃から、雑誌の対談や叢書の刊行などの計画で、石井先生とお話する機会も多くなった。これは、将門の地盤となった地域の考古学的発掘と地形復元の成果を取り込み、十世紀の武装と官牧の制度変化の中に『将門記』を読み直したものである。しかし『史学雑誌』の「回顧と展望」で「将門たちは馬を食い鉄をなめて暮らしていたのであろうか」という批判を受け、日本古代史学界の水田一元論のすさまじさを痛感させられたのであるが、実はそうした「水田一元論」への批判は、司会をなさった石井先生の見事な手綱捌きで進められた網野善彦氏と三人の座談会で、東国後進地説見直論の一つの基点として既に提起されていた問題なのであった(『歴史と人物』1978・2月号)。

この頃には国立歴史民俗博物館の設立準備が始まっており、石井・網野両氏はそれに参画されていたが、考古学と民俗学の接点で中世を見直そうとした『よみがえる中世』では、異なった学問分野の方々と一緒に本を作る楽しみを、私も共にすることができた。平凡社にお出で戴いてうかがった

考古の方々のお話と、その後の一杯傾けながらの雑談はどれも興味深かったが、その第四巻「北の中世・津軽・北海道」の原稿依頼のため編集者と北海道の所々を訪ねた経験や、石井・網野両氏と上ノ国の勝山館遺跡を訪問した思い出は忘れられない。振り返ってみると、後に私が歴博に勤務することになるのも両氏のお力添えがあったために相違ない。石井先生から受けた恩恵は学問の面に限るものではなかったことになる。

考古学・民俗学の動向にも詳しい石井先生は、リュックサック姿のよく似合う方だったが、新潟県豊浦町の北沢遺跡を発掘された川上貞雄氏のもとへ一緒する機会もあった。この遺跡はわが国で初めて確認された鋼精錬遺跡で、当時の和鉄生産の「通説」とは合致しないところもある川上氏の説明に、石井先生は実心的確に対応されていた。この遺跡を契機に、前近代の鉄の生産も、木炭で溶融し鋳型に流し込む銑鉄の生産が基本であることが再確認され、それまで「製鉄遺跡」とされていた発掘遺跡の一部には見直しを迫られたものもあるが、中世庶民の煮炊き道具が鉄鑄物の鍋・釜であることを考えると、この遺跡は、中世考古学の中で、旧石器時代の上高森遺跡に比すべき役割を果たすことになったともいえよう。

中央公論社『日本の歴史7 鎌倉幕府』や小学館『日本の歴史9 中世武士団』でもわかるように、文献史料に厳密な史料批判を要求された石井先生は、紙背文書の解読や他の学問分野との共同作業によって歴史資料の幅を広げ、「通説」見直しの道を拓かれた方であった。

心から先生のご逝去を悼み惜しむものである。



「駈入り農民史」

四年 仁科 和美

去る1月31日、鶴見大学による石井進先生を偲ぶ会が執り行われました。先生がご逝去されて3か月余り経ちますが、私の中では先生が居られない事実を未だに信じたくない気持ちで一杯です。

先生は、全ての生徒を気にかけて、常に平等に接して下さいました。演習の授業の前には、自宅の書庫から持参した本を、卒論研究に役立つからと快く貸して下さいました。私も、先生から勧めていただいた本が絶版で、古本屋でも見つからず途方に暮れていると、「私の家で探しますので、お貸ししましょう」と言い、後日郵送で届けて下さいました。後にお聞きした話によると、この時貸して頂いた阿部善雄著『駈入り農民史』（至文堂）は先生が著者本人からいただいた本であり、著者もお亡くなりになった事から、先生にとって大変貴重な本であったそうです。そのような本をお借りしてしまい、申し訳ない気持ちとともに嬉しくもありました。後日、先生から私の自宅に電話で古本屋に足を運んでみたら、例の本があったので、その買った本を君にあげましょう、という連絡をいただき、更に感激したのを昨日の事のように思い出されます。『駈入り農民史』とその時一緒に添えて下さった手紙は、私の宝物です。今でも、その本を見ると先生を思い出し、涙が出ます。もう少し時が経ってから、先生が指摘された点を踏まえてじっくり読んでみようと思います。

先生とは、お話や旅行する機会を得る事ができ、とても幸せだと実感しています。しかし、自分の知識の乏しさから、突っ込んだ歴史の話をお聞きする事が少なく、心残りです。それに、パリに旅立たれる前に「それではみなさん、又再来週」とおっしゃったのに…。先生の最後の授業であった史跡特論Ⅱでは、普段よりも忙しそうに教室を後にされたように思います。前日まで遠方での講演を終え、鶴見での授業、そして翌日はパリという激務をこなされていた、とお聞きしました。ゆっくりお休み下さい。私たちはもう先生にお会いする事はできませんが、先生の著書や、たくさんの思い出を胸に頑張っていきたいと思えます。先生から学ぶ事ができて本当に幸せでした。一生の誇りです。本当に、ありがとうございました。

「中世都市研究会とゼミ旅行」

四年 山田 正孝

今、私達4年生は、大学生活を終えようとして居る。先生がお元気であれば今頃、卒業旅行を兼ねての遠野旅行の計画をされているはずであり、

また3月には定年退職され、私達と共に本学を去られるはずであった。しかし石井先生は永い眠りにつかれてしまわれた。あまりにも突然で、まだ先生のいない現実を受け入れられない時がある。先生との思い出は語り尽くせないほど多く、このような形で先生の事を書くのは本当に本意であるが、少し先生との思い出を書いていきたい。

先生は本学に来られた当初から学生達の輪に積極的に入ってこられ、歴史の話については勿論、普段の雑談にも参加して下さっていた。特に史跡特論の授業の後には月に1回ぐらいのペースで、飲み会を開かれたり、また、その年の夏には「中世都市研究会」の後、山形、宮城、岩手県を見学し文化財、歴史についてたくさんのお話をして下さいました。

翌年、石井ゼミができ、私もその一員となり、大変お世話になった。ゼミでは『吾妻鏡』の講読を半年間行ない、史料に対する姿勢、史料批判の方法、歴史的事象の古文書による裏付の方法論などを御指導頂いた。また、神奈川県の小田原・真鶴に最初で最後のゼミ旅行に出かけた。その時の先生は常に先頭に立ち、後ろで歩き疲れる私達を励まし、悠然と歩まれていた。その足腰の強靭さに驚いてしまった覚えがある。

今年度になると卒業論文作成の為、先生はゼミ生一人一人に面談を行ない、作成の為の助言を沢山して下さいました。先生がお亡くなりになってから知ったことであるが、お宅には私達ゼミ生の個々の研究の為に各自に必要な本を用意し、ご自身も熱心に勉強されていたそうである。今更ながら、先生が本当に私達学生を大事にし、考えて下さっていたのだと痛感している。卒論も無事にゼミ生全員提出することができた。これが先生と共に考察、研究してきた私達の唯一の証しとなってしまった。出来は悪く、とても先生に提出できるものではないのかもしれないが、一生忘れられないものとなった。

まだ書きたいことは多いが最後に、石井先生、



今まで本当にありがとうございました、お疲れさまでした。そして安らかにお眠りください。

追記 今でも六号館玄関前のベンチに座っていると、石井先生が背広姿にリュックを背負い歩いてこられ、私達に「何、やってるの？何の集まり？」と笑顔で話しかけてくださるような気がしてならない。

「石井先生のリュック」

四年 藤盛 彩子

石井先生と過ごすことができた数年間は、私にとって一生忘れることのできない思い出ばかりです。今でも先生がリュックを背負って、私達の前に笑顔で現れるのではないかとよく思うことがあります。リュックを背負った姿は、先生のチャームポイントの一つであって、遠くからでも先生を見つけることができました。大きなリュックの中にはたくさんの本が入っていて、その中のものは私達のためにご自宅からわざわざもってきてくださった本の割合が多かったかもしれません。

それから、先生は「定本柳田國男全集」を購入して研究室に運んでくださり、「僕の研究室で調べなさい」、とおっしゃってくださいました。私は先生のご厚意に甘えて、何度も研究室にお伺いして、調べさせてもらいました。近くでは先生は痛む足をさすりながらお仕事をされていました。そして、先生に柳田先生のことをお聞きしたこともあり、先生が柳田先生のすばらしさを教えてください、柳田学の伝説のおもしろさを知ることができました。「柳田さんは、伝説は英雄や貴人であれば誰にでも置き換えが可能なものである」と言っておられる」と先生は何度もおっしゃっていました。このことについて、伝説を調べていく中でこの言葉をつくづく実感しました。こんなにも先生が一生懸命にご指導してくださったのにもかかわらず、卒論に反映させることができなかった自分がとても情けなく、先生に対して恥ずかしさと申し訳なさの気持ちで一杯です。

先生は誰に対しても対等な立場に立って私達と接してくださいました。常に先頭に立たれ、私達を導いてくださったように思えます。先生の優しさに包まれながら大学生活を送ることができて、私は本当に幸せ者でした。最後に、先生にいつもご迷惑ばかりかけてしまい申し訳ありませんでした。それと、いろいろな面からサポートし続けてくださり、本当にありがとうございました。

「石井先生の姿勢と熱意」

四年 吉岡 修作

石井先生に対する追悼文を書くことになるとは、

未だにどこか飲み込めないでいます。

私は何よりも先生の「姿勢」に憧れていました。それは努力や苦勞を感じさせないごく自然の、天性ともいべき「姿勢」でした。先生を見ていると、学問を素直に楽しんでいるようにしか感じられず、それはあたかも日本酒に舌鼓を打っている時と何ら変わらないように思えました。これは私の勝手な思い込みかもしれませんが、そんな風に自然と学問を凌駕してしまう先生の「姿勢」に私は憧れていました。

そして、何よりも先生の静かな「熱意」に励まされました。私も戦国史に対する熱意をもていましたが、それは先生の「熱意」と比較にならないものでした。「月とスッポン」とはこう言うことなのだ、初めて実感した思いでした。また、先生の場合はただ偉大だけでなく、自然と周りの人を励ましてしまう力があつたと強く感じています。本当に先生の静かな「熱意」には何度も励まされました。

先生が亡くなられてから数ヶ月経っても、未だにその事実を飲み込めていないのは、きっと先生の「姿勢」に憧れ続け、先生の静かな「熱意」に励まされ続けているからだと思います。

先生には学問のみならず、人間の目指すべき方向を教えてくださいました。きっと、こんなことを言っていると笑いながら謙遜されてしまいますね。そして、先生の御陰で私にとって掛け替えのない大学生活を送らせて頂いたことは確かです。これからも石井先生に教えて頂いたことを忘れずに努力していきたいと思います。

また、いろいろと指摘してくださいね。

「石井進先生を偲んで」

四年 白井 真理子

石井先生という思い浮ぶのは、にこやかな笑顔でした。講義などで教室にいらっしゃるとき、笑顔で丁寧に挨拶して下さった、先生のお人柄が偲ばれます。



ゼミの飲み会の時など、私たち学生に御酌して下さり、「先生にこんなことさせてしまっているのだろうか。」と思いつつも、先生の気さくさに甘えさせていただいたこともありました。

先生には、ゼミで指導していただいたのはもちろんのこと、他に「古文学書」「日本史概説」「史跡特論」などの講義でお世話になりました。どの講義においても、懇切丁寧に指導していただき、様々な分野における先生の豊富な知識に大変感銘を受けました。

3年生の時のゼミで、『吾妻鏡』の講読をしていただいたことも印象に残っています。『吾妻鏡』は量が多いので、頼朝挙兵のあたりまでの講読でしたが、先生は、語句の意味から、登場人物の人間関係の説明を丁寧に講義して下さり、文章から読み取れる疑問点を提示されました。自分の勉強不足を反省しつつ、とても興味深く講義を受けました。

また、先生は史跡の復元の問題点についても常々おっしゃっていて、史跡を見るときに注意点を教えていただきました。

先生から教えていただいたことは、私の一生の財産になっていくと思います。

先生には講義その他で大変お世話になり、卒論や就職のことで御心配をおかけしたと思います。お世話になった御礼を十分に申し上げられず、悔やまれてなりません。この場を借りて先生に感謝の気持ちを伝えることができればと思います。

石井先生、本当にありがとうございました。

「八海山」

四年 高橋 智美

石井先生が卒論の進行具合を非常に心配されていた中での突然の別れから、卒論も提出し終わり、もう少しで大学生活も終わるといふのに、今なお先生が、リュックを背負って笑顔で現れるような気がしてなりません。

その卒論は、先生が以前紹介して下さった『曾我物語』を題材に、無事提出することが出来たことを改めて報告致します。先生はひとまずご安心されたと思いますが、御覧になったら「うー」と唸ってしまう表情が目につきます。

先生とお話した最初の機会は、ゼミの最初の集まりだったと記憶しています。先生は個々に対して、今後何をしていきたいかを質問された時に、私は民俗学を学びたい事を伝えましたら、「んー、あれは誰もやらないから書いてただけなんだよな。」と笑顔でおっしゃいました。先生のこの発言は、今でも忘れません。

またゼミでのお酒の席では、先生を中心に学問

に限らず、様々な話をして頂きました。日本酒を頼むと、蔵元の話にまで広がり、きまって「高橋さん、じゃあ飲みなさい。」とおっしゃって、恐れ多くも先生自らついでいただいたお酒を、いつも美味しくいただいたことをつい昨日のこのように思い出します。

先生とはもっとお酒を飲んだり、お話もしたかったし、石井ゼミで今後は3年生も交えて旅行にも行きたかったなど、先生と過ごしたい時が次々と頭に浮びます。

大学生活は終わってしまっていますが、先生から学んだことをこれからは生かすことが大切だと思いますし、また今年の曾我傘焼き祭りにも行きたいと考えています。今度は、八海山を持参して伺いたいと思うので、以前飲めなくて残念だったこのお酒、一緒に飲んで下さいね。

「石井先生の笑顔」

四年 平川 小枝

「いやぁ～遅れてすみません。科会が長びきました。」

毎週、この第一声で、私たち石井ゼミは始まったような気がする。この始まりが卒業するまでの毎週木曜、ずっと続くと思っていた。石井先生のゼミ生になって早2年が経とうとしている。

去年の今頃、石井ゼミの一人一人が面談を受ける事になった。これからの卒論に対する相談だったと思う。私は、その頃、卒論という大舞台で何を研究したいか、決めてなかったので、その様な気持ちで先生に会うのにはかなりの緊張があった。でも、緊張は先生の人柄に、ほぐされていくのだった。

先生と私は、卒論の話は、後半に少ししただけで、あとは私がこの学科に入って感じていること、また悩んでいる事、就職の事を話したのをよく覚えている。大学に入って心の相談を先生にしたのは石井先生が初めてだった。

また、一番記憶に残っているのが「鎌倉で一番



おいしいカレー屋の話」だ。先生がおっしゃっていたカレー屋が本当に美味しいのか今度確かめに行きたい。

そして、最後に思い出の一つ。夏休みに入る前のゼミのとき、私は先生に怒られた。多分、先生に怒られた人は少ないのではないかと怒られた理由は、私がちゃんと勉強をしなかったから。それにしてもあんなに険しい先生を見たのは、日本史概説の授業以来だった。「もっと勉強しないとだめだ。ちゃんと調べなさい。夏休み本気でできるかい？」と。その場は、「夏休みは力をもっといれて勉強します。」と、言い残し帰った。怒られるというのは、とても心配されていたから。この事を思うといつも後悔の涙が止まらない。

でも、どの一つを思い出しても、先生は笑っていた。私は先生の笑顔は忘れません。そして、講義が始まった時の真剣な顔も……。

石井先生、3年間、本当にありがとうございました。

「石井先生との思い出」

四年 村居 洋子

石井先生が御逝去されたとの連絡を受けた時、丁度私はその週のゼミで発表する内容を考えていたところでした。正直信じられませんでした。あれから御葬儀、卒論の提出等、振り返ってみるとかなりの時間が経っていますが、大学に来る度に、まだどこからか、あの暖かな笑顔で「やあ、遅れまして…」と言いながら先生がいらっしゃるのではないかと思う時があります。昨年末、大学生生活中で撮った写真を整理した中に皆で行ったゼミ旅行の写真もあり、それを見て益々そんな思いを募らせました。

ゼミ旅行は忘れられない思い出です。小田原城や佐那田神社等、あの時廻った各地で先生に非常に丁寧な説明をしていただき、それから旅行後、ようやく本格的に卒論の内容を考えるようになりました。それから約半年、先生は御多忙の中、質問や相談にも快く応じて下さり、親切に指導して下さいました。まだまだ、お聞きしたいことも沢山ありましたし、就職活動のことも気にかけて下さっていたのに、先生の御存命中に結果が報告できなかったのも、今となっては残念でなりません。

先生の話の中で一番印象深いことは、進路の話をしていた時に、先生が「学問は一生をかけて行うもの」というような話をして下さったのを覚えています。卒論はその序の口だという様な話だったのですが、私は暗に「これからの人生でも、色々なことを学びなさい」とも言われた様な気がしました。

先生の生徒としては未熟すぎる私ですが、これからもその様な学ぶ姿勢を忘れずに、先生が安心して見守って下さるようにがんばっていきたいと思います。

石井先生、本当にお世話になりました。



「石井先生と博物館研究部会」

三年 宇田川 雅美

先生にはいつも本当に迷惑をかけてばかりだったと思います。特に私個人としてお世話になったのは勉強の面ではもちろんのことですが、やはり博物館研究部会のことです。

部会では、先生は見学へ行く所へはいつも事前連絡して下さい、そのおかげで私達は学芸員の方々に詳しく話を聞くことができました。例えば、先生が行けなくても先生は誰かしらの連絡先を教えてくださいました。考えてみると私は先生に甘え過ぎていたように思います。また一昨年、先生に御一緒して頂いた東京大学史料編纂所の見学は毎年恒例になりつつあります。

見学だけではなく勉強会も先生に頼んで今の博物館における現状を話してもらい、それが部会の研究への問題提起になったと思います。「いつも参加する人数が少ないなあ」と言われて、その度に私の努力が足りないのだと感じていましたが、今後は先生に教えられた通り、もっと見学や研究に力を入れてみんなで頑張りますので、いつまでも私達を見守っていて下さい。先生、本当にありがとうございました。

「石井先生の講義で学んだもの」

三年 榎本 純之介

私は、石井進先生のゼミに3年生の後期から在籍しておりましたが、担当教員としての先生の御話を拝聴する機会は、非常に限られたものとなってしまう、とても残念に思っております。

しかし、先生の講義を拝聴する機会は、けっし

てゼミにおけるものだけではありませんでした。私達3、4年生は、1年生の頃から先生の講義に接する機会に非常に恵まれていたと言えると思います。

私達3年生が1年生の頃は日本史概説、2年生になると専門科目として古文書学、史跡特論、日本史Ⅱなどを受け持っておられました。私は、日本史Ⅱの講義は3年生の後期からとなっており、数回の講義を受けるにとどまりましたが、先生の講義を受けた際の記録は、私が歴史を学ぶ上で、非常に大切なものとなりました。

また、講義以外でも、2年生の夏の事です、先生に同行して、「中世都市研究会」の山梨大会に参加させていただきました。他にも、私達学生と、学外においても様々な交流をもつていただき、拙い私の質問等に対しても、丁寧に答えてくださいました。

大学に入り、先生の講義や先生方との交流の中で、歴史を学ぶ事の面白さ、興味深さ等、多くの事を学び、さらにこの学問が好きになっていきました。先生から学んだ事を大切にしながら、これからも、この学問を勉強していきたいと思えます。

「歴史学者と歴史」

三年 菅原 聡

入学して間もない頃、幸運にも石井進先生とお話する機会に恵まれた。そのとき先生が「君、H・E・カーの『歴史とは何か』は読んだ？」と尋ねられたので、私が読んでいませんと言うと、先生はにっこりと微笑みながらおっしゃった。「歴史とはそれを書いた歴史家を知ることだよ。」と。しかし、私にはそれが一体何を意味するのかさえわからなかった。

その後、先生のところに伺うといつも先生は親切にご指導下されたが、時折興が乗られたか、先生の先輩方、同僚、論敵を問わず、先学達のその人となりを楽しそうに語られることが幾度となくあった。網野善彦、石母田正、戸田芳実、永原慶二…。どの人物を上げても当代一流の歴史家ではないか。それらの学者達を縦横無尽に語りつくす先生の前に私ごときはただただ、舌を巻くしかなかった。だが、先生は決してただの思い出話に沈溺されていたのではなかろう。それは遠い中世という時代を研究されながら常に苦難の戦後史を先生はじめ、先達が歩んでこられたその証明である。今思えばこれこそが、歴史家を研究し知り尽くしたもののだけが語りえた歴史であったのだろう。

さて、ごくささやかなご縁であったにせよ、私は恐れ多くも石井進先生の思い出話を語らねばならぬ立場に立たされた。しかし私は先生のことを

語ろうとした途端に足がすくんでしまう。果たして我々は歴史家石井進に何を見たのか？何を学んだのか？先生の言葉の英知をどれほど汲みえたのか？先生は多くの謎を残したまま逝かれた。今、その著書を開くたびにそう思う。

「石井先生へ」

二年 石塚 賢治

頭を上げると先生の御車はもう視界から消えて、遠くに逝かれたのだと改めて思いました。

・・・先生の御講義を受ける以前、博物館研究会に参加したお陰で、幾つかの博物館へお伴し、最近では江戸東京博物館『時宗とその時代展』へ行った時の状景が思い出されます。先生は、北条氏の年表を多勢の入館者が読んでいるのを御覧になって「いかん。これは僕が書いたんだ」と照れたように、額を手で叩かれて、足速に去ってしまわれた。私は先生がちょっと微笑しく思えました。(失礼)館内の展示品を我々学生に詳しく説明して下さった後、皆で両国駅前のレストランでビールを飲んだ時の先生のお顔を忘れる事はできません。それはおいしそうに飲んでおられたので、先生の御著書『鎌倉びとの声を聞く』にサインをお願いしようとしていたのですが、とうとう言いそびれてしまい、今でも少し残念に思っています。

石井ゼミでは、『吾妻鏡』の「宝治合戦」の条を取り上げて、ゼミ生が予習し輪読して先生は学生に質問、解説される進め方で、本文の内容は勿論ですが、登場人物の安達氏、三浦氏や北条氏の屋敷の位置関係への御言及や『吾妻鏡』編者の、事件がある時は必ず、最初に異変の事象を記述する導入部を用いている構成面の御指摘も憶えています。ゼミ生一同、『吾妻鏡』中、物語性のある「宝治合戦」の御講義が楽しくなっていた所でした。そして、フランスへ出発される前のゼミで「土産話を楽しみにしております」と申し上げていたところ、お帰りになってすぐの訃報を聞くことになるとは、全く信じられない気持ちです。しかし、今は「先生、全ての雑事から解放され、天国でお好きなビールを飲んでゆっくりして下さい」と申し上げます。

鶴見の桜も、後3ヶ月で咲きます。

先生、さようなら。

卒業論文一覧

指導教授：石田 千尋

- ・伊藤安都江 「日本写真史に関する一考察
—特に横浜写真について—」
- ・伊藤 清志 「近世日光道中における城下町古
河について」
- ・稲葉 正人 「江戸時代初期における排耶活動
について」
- ・河本 太郎 「幕末における西洋砲術につい
て—1840年から1860年までを中
心として—」
- ・小林 崇 「シーボルト事件と江戸参府」
- ・實藤 聡美 「近世における輸入洋書から見た
西洋文明浸透過程について—司
馬江漢を中心として—」
- ・寺前 聡 「近世における長崎警備につい
て—大村藩を中心として—」
- ・富川 武史 「東アジアにおける古墳壁画の比較
研究—特に四神図をめぐる—」
- ・仁科 和美 「駆込寺東慶寺の存在意義について」
- ・林 美菜保 「出版文化から見た近世民間信
仰—七福神を中心として—」

指導教授：大三輪龍彦

- ・石森 啓太 「瑩山禪師の世寿について」
- ・加藤菜穂子 「中世太平洋岸における商品流通
ルートについて」
- ・金子 友宏 「軍忠状における二、三の問題」
- ・久保田 豊 「人物埴輪の顔面彩色について」
- ・古田土俊一 「中世都市鎌倉における土地儀礼
—地鎮遣構を中心—」
- ・白井真理子 「鶴岡八幡宮流鏑馬の成立について」
- ・谷口 清香 「近世能登にみる頭振の実態につ
いて—時国家文書を中心—」
- ・能條 健太 「武蔵型板碑から見た二、三の問題」
- ・福富 良陽 「養蚕と稲荷信仰」
- ・松吉 大樹 「中世都市鎌倉の文献的基礎研究」
- ・村居 洋子 「中世の庶民生活について」
- ・矢崎 大貴 「武田氏の諏訪支配について」
- ・山本千華子 「胎蔵界曼荼羅における図像的、
三の問題」
- ・檜田 綾子 「後北条氏領国の半手支配」
- ・吉岡 修作 「浅井氏関係城館の実態について」
- ・渡邊 慎司 「織田信長によるキリスト教政策」

指導教授：河野真知郎

- ・小田切義仁 「中世寺院の出土遺物とかわらけ

編年—中世都市鎌倉の寺院につ
いて—」

- ・鳥 真利子 「縄文時代の集落研究—竪穴住居
の規模分析を軸として—」
- ・猿田 功一 「中世鎌倉おける都市の様相—出
土遺物から住民階層を考える—」
- ・篠原 秀幸 「中世前期のかわらけ—鎌倉を中
心に—」
- ・鈴木 弘太 「常滑焼の生産地編年と鎌倉での
出土の実態」
- ・土屋 奈穂 「中世鎌倉の祭祀遺物の分類—鎌
倉駅周辺の遺跡でみられる木製
形代について」
- ・寺嶋 美晴 「浪岡城と中世東北」
- ・仲田 悦教 「古代地方官衙とその周辺集落の
特徴と変化—建物の軸方向を
中心として—」
- ・根本 剛宏 「古代祭祀遺跡及び祭祀遺物につ
いての考察—静岡県駿河・遠江
地域を中心として—」
- ・渡部 賢史 「鎌倉の中世瓦—その形態と生産
地をさぐる—」

指導教授：関 幸彦

- ・小松 桂子 「僧兵について」
- ・齋藤 孝明 「大山信仰と平塚」
- ・山東 丈洋 「小野篁説話にみる情報の変化」
- ・高橋 智美 「曾我物語における信仰の変遷—
怨霊信仰から御霊信仰へ—」
- ・高山 晶子 「房総里見氏と「天文の内証」
- ・津田紗和子 「下野国温泉考」
- ・七澤美加子 「坂東における源氏勢力の展開」
- ・二階堂裕介 「日本刀起源の一考察」
- ・野田 知宏 「鎌倉における鶴岡八幡宮雅楽に
ついて」
- ・平川 小枝 「『吾妻鏡』における北条政子」
- ・藤盛 彩子 「義経伝説の成立と展開」
- ・山田 正孝 「鎌倉幕府における法と訴訟—薩摩
国「山田文書」を中心にして—」

指導教授：中里 壽克

- ・五十嵐健太 「奈良時代から鎌倉時代における
螺鈿技法の研究」
- ・磯部 太一 「枝縮めとその染色法に関する歴
史と復元の研究」
- ・大石 涼子 「江戸時代各地の漆器産業からみ
た小田原漆器の歴史と技法につ
いて」
- ・友部 愛子 「八世紀における脱乾漆の強度に
関する研究」

- ・野間 勇佑 「万国博覧会に出品された柴田是真の蒔絵額について」
- ・吉岡 奈穂 「色漆の発色に関する研究」
- ・吉田 洋平 「東京都の伝統工芸にみる歴史と技法について」

指導教授：永田 勝久

- ・稲田 敬子 「壁画の劣化及び色調変化に関する基礎研究」
- ・岩下 雅人 「石造物の保存処理について」
- ・柏木 俊亮 「木製遺物の保存処理後の保管環境について」
- ・金子 誠 「木製遺物の保存処理（PEG含浸

処理とラクチール処理の併用について）」

- ・木村 文香 「焼き付け漆の基礎的研究（表面処理と接着性について）」
- ・小泉亜由美 「和紙の劣化と引張強度について」
- ・鈴木真理子 「中世鎌倉の出土漆器の赤色顔料について」
- ・矢田 晃代 「出土漆器の保存処理について」
- ・吉田 匠 「木製遺物の保存における基礎的研究」
- ・吉田 奈央 「中世鎌倉出土かわらけの組成分析（在地産土器の胎土の特定について）」

文化財学会 春季・秋季大会関連報告

〈春季大会〉

講演「文化遺産としての雅楽」をきいて
報告 三年 宮崎 正二

平成13年度、文化財学会春季講演会は、6月2日土曜日に『文化遺産としての雅楽』と題して開催されました。

今回は、上野雅楽会の皆様と東京学芸大学専任講師でいらっしゃる遠藤徹先生をお招きしました。従来の大会とは趣向を変え、前半に上野雅楽会の皆様による生演奏、つづいて後半に、遠藤先生の講演という二部構成で展開されました。

始めに、上野雅楽会の皆様による演奏が行われました。楽曲は『越天楽』で、雅楽といえばその名前が頭に浮かぶほど有名な曲です。あの黒田節の原曲ともいわれ、学校の音楽の授業でも雅楽の代表曲として取り上げられていますから、御存じの方も多かったのではないのでしょうか。

雅楽の管絃の編成は、三管と呼ばれる、笙（しょう）篳篥（しちりき）笛をそれぞれ3人の計9人。両絃と呼ばれる、琵琶、箏（そう）を2人ずつの計4人。三鼓と呼ばれる、羯鼓（かっこ）、太鼓、鉦鼓を各1人ずつの合計16人により構成されています。

笛が楽曲の最初の数小節を吹くと羯鼓がトントンと入りつづいて太鼓、さらに三管（笙、篳篥、笛）が一斉に演奏を始め、琵琶、箏が順に加わり、一つの形になっていきました。

『越天楽』のメロディーとハーモニーは、現代人に親しみと興味を抱かせる不思議な魅力を持っているように感じられ、同時に、普段見慣れている大会館地下ホールが、恰も宮中であるかのような雅やかな空間に一変しました。

『越天楽』の演奏が終わると、つづいて舞楽『蘭陵王』が行われ、舞手を文化財学科4年の野田知宏さんが担当しました。『蘭陵王』は北齊の王長恭という顔の美しい人物が、戦場での兵士の士気を高めるために仮面をつけて戦いの指揮を取り、大勝利を得たのでこれを喜んだ部下が作ったものだといわれています。『越天楽』の余韻をそのままに、舞台の上を所狭しと舞が披露されました。

雅楽というものを十分実感したうえで、遠藤先生に『文化遺産としての雅楽』という題で御講演頂きました。講演の主旨としては三つに構成され、1つ目は雅楽中心の日本音楽史について述べられました。シルクロード以西の音楽と諸アジアの音楽が中国で融合し、日本へ伝来してきたという雅楽の発生、日本での雅楽の発達と変化という歴史の変遷についてです。2つ目



は文化遺産という視点から現在の雅楽について述べられました。日本に伝来し、現在のような形となっていた雅楽の系統と種類を映像を通して丁寧に解説頂きました。そして、最後に雅楽の現状の問題点と将来について述べられました。楽家により口伝という形で、代々傳承されてきたこと。衣装、楽器、面を作る技術の担い手の問題です。また、今日の宮内庁雅楽部の人員が26人と演奏を行うのにギリギリの人数しかないという事実を危惧していたのが印象的でした。

今回の春季大会は演奏の後に講演を行うという従来の形にないものであったように思います。しかしそれは、大変、文化財学科らしい構成だったといえるのではないのでしょうか。次回以降への新たな可能性を感じさせてくれる大会であったと思います。

最後になりましたが、遠藤徹先生、上野雅楽会の皆様、ご協力有り難う御座いました。

〈秋季大会シンポジウム〉

講演「建長寺遺跡

—その遺構と出土品」をきいて

報告 三年 佐々木 英明

建長寺が創建750年記念事業の一環として、新客殿の建築が計画され、その周囲の発掘調査が実施されました。その発掘調査の主体をなしていたのが本校であり、そこで発掘調査報告と関連研究報告の発表を今回平成13年11月17日土曜日、秋季シンポジウムで「建長寺遺跡—その遺構と出土器」というタイトルで開催しました。

今回の秋季シンポジウムは午前の部、午後の部と二部構成によって行われました。

午前の部では基調報告として鎌倉考古学研究所所員であり建長寺発掘調査主任の宮田眞先生に「史跡建長寺発掘調査の成果」という論題で御発表頂きました。その中では中世から近現代までの遺構状況について論及され、特に方丈池、庭園形態の移り変わりが検出できたこと、応永21年（1414年）の大火の際の火事場整理の遺物が池遺構から大量に出土し、その時代の活動の様相を知ることができたこと、1986年の調査と同様に検出遺構と指図の伽藍配置の一部が整合したこと等、今回の発掘の大きな成果を述べておられました。

それから、基調報告後、昼休みを挟んで午後の部、関連研究報告に移りました。

最初に本学非常勤講師であり建築史が御専門

である鈴木巨先生に「建長寺伽藍の構成と建築遺構について」という論題で御発表頂きました。鈴木先生は建長寺との関連文献を通して、創立期から江戸期までの建長寺伽藍変遷について述べられました。

次に「玉雲庵址について」という論題で東国歴史考古学研究所所長である田代郁夫先生に御発表頂きました。田代先生はスライドを用いながら、玉雲庵址の内容や発掘成果を述べられました。又、地下式墳の形成におけるやぐらとの関連性についてや、玉雲庵内での庶民信仰という点についても指摘されていました。

続いて本学文化財助手である福田誠先生に「漆器の保存処理」という論題で御発表頂きました。福田先生は、建長寺漆器遺物をラクチトール合浸法による保存処理と鉛玉を用いた埋没法を併せて行った結果について述べられました。この保存処理は、遺物に与える影響を最小限におさえられたこと、又、ラクチトール合浸法のさらなる可能性についても述べておられました。

最後に工芸史の観点から本学教授である中里壽克先生に「建長寺出土漆器の技法と復元」という論題で御発表頂きました。中里先生は、朱塗碗の歴史を述べられた後、天目碗は本来朱漆を用いるのが普通であるが今回出土された黒天目碗のその名通り、黒漆が用いられているのはめずらしいと論じられました。また、黒天目碗と眉間寺碗との形態の類似性など、建長寺出土碗の特徴について発表されました。

そして関連報告後はパネルディスカッションが行われました。そこでは、本学教授の河野眞知郎先生を司会に、発表された先生方とコメンテーターとして今回の発掘調査団団長で本学教授の大三輪龍彦先生に参加して頂き、討論を行いました。発表での疑問、確認できなかったことについて、深く追求する形となり、私達学生にとって探求心をかきたてられるものとなりました。

さらに禅宗について本学専任講師である尾崎正善先生に説明していただき、活発な意見が飛び交い非常に有意義なパネルディスカッションになりました。この様に秋季シンポジウムは盛況の内に幕を閉じることになりました。

最後にその場に故石井進先生がいらっしゃらないことが残念でなりません。これから石井先生のためにも、一人ひとりが文化財学科を盛り立てて行きたいと思っております。

学会 左見右見

私が望む文化財学会像

一年 高橋 拓也

この度学会の原稿を依頼され、まだ入学して間もない私に何が言えるのか迷いました。しかしながら、逆に1年生だから感じられる事を書いてみたいと思います。

今年は私にとってとても有意義な年でありました。それは夏休みからの発掘のアルバイトやシンポジウム、ウェブサイト委員など、さまざまな角度から文化財に触れられたからです。

学会・各研究部会には先輩達との交流の場があります。先輩の言葉は1年生にとって刺激があり、授業、実習のアドバイス等もしてくれます。そして、時には、先輩の実習にも参加させてもらえます。実際、私も先輩方から多くのことを学びました。しかし、1年生は学会への浸透があまりに低く、先輩との交流があるとは言えません。これは非常にもったいない事ではないでしょうか？

文化財学科も全学年が揃い、少人数制の学科だからこそ先輩方との交流を深め、1年生から4年生まで垣根を越え切磋琢磨することが、これからの文化財学会を盛り上げていく鍵になるのではないのでしょうか？そのためにも、もっと学会・各研究部会を開かれた物にしなければならぬと思います。そして、広い視野から文化財をみつめ、それぞれが興味を持った道へと進んで行けたならば良いと思います。

文化財学会について

二年 山口 悟史

文化財学科は本年度で1年生から4年生が揃い、今春一期生が旅立ちます。また、文化財学会は今年で三年目を迎えることになりました。

文化財学会、と聞くと堅そうなイメージがありますが、春季講演会、秋季シンポジウムと年2回の講演を聞くことができ、とても価値のあることだと思います。また、学会では先生方の授業では見られない一面も見ることができるかもしれません。そこが文化財学科ならではのところではないでしょうか。

そして、この文化財学会の中には、部会という活動があります。失礼ながら私自身は部会に所属していませんが、時間があつたら興味

のある部会を覗いてみたり、自分がやってみたいことを仲間と立ち上げてもいいと思います。そして部会での活動成果を大会で発表すれば、興味を持つ人がいるかもしれません。問題は、部会がいつ活動しているのかです。その部分をもっと明確にして欲しいと思います。部会が活発になれば文化財学会、ひいては文化財学科の活動も活発になると思います。

まだ学会の歴史は浅いですが、私は文化財学科全員で築き上げていける唯一のものだと思います。そしてこの活動が私たち自身の活動の糧になることを思えば、この文化財学会は、とても重要で価値のあるものだと思います。ではないでしょうか。

文化財学会に参加してみませんか

三年 荻野 貴博

今年は、いよいよ一期生が卒業し、一期生の活躍が期待される年である。また設立3年目のこの若い文化財学会もまだまだ発展が期待される年でもある。そこで、この文化財学会の更なる発展に対して私達に出来る事は一体何だろうか。

私自身も含めて言える事だが、やはり意識の問題が一番である。私達は何かしら興味を持ってこの大学に入ったのだから、その興味をもっと掘り下げなければならない。また常にアンテナを伸ばし、色々な事に興味を持って取り組むべきである。そのためには積極的に学会へ参加する必要がある。

ここからは、学会に対する私の要望である。過去の大会・シンポジウムは、人文・自然諸科学を絡め、また雅楽と言った無形の文化財も取り上げ、文化財学科らしく有形無形文化財を問わず行われてきた。この事は非常に素晴らしい事である。しかし、少し考古学に関する事が多かった様に思われる。もう少し文献・文書を取り入れてもよいのではないかと思われる。私自身アーキビスト（史料保存管理専門職）に興味があるので、アーカイブズ・アーキビストについての大会・シンポジウムが開かれれば幸いである。

一人一人が問題意識を持ち、課題に取り組み、皆で良い学会を築き上げていきたい。

研究部会報告

江戸東京研究部会

江戸東京研究部会では今年2月、品川御殿山英国公使館跡と旧東海道品川宿周辺を見学しました。この見学のきっかけとなったのは、昨年12月に東京国立博物館で開催された「時を超えて語るもの—史料と美術の名宝—」展に『御殿山公使館地図』（文久元年）が出品されていたからです。この度は品川宿も併せ、近世の視点で見学しました。

まず品川駅から八ッ山橋を経て品川宿に至り、最終的に御殿山へ到達するというものでした。文久年間の絵地図を見ながらまわりましたが、当時と現代との位置関係はほぼ特定できたとします。例えば現在その建物はなくても、町が大きく変化したとしても、絵地図に記された地名や地形と比べると現在と一致する所は多く、そこから当時との位置関係の特定をすることが出来ます。実際、このように史料を見ながら歩いてみるという事がいかに重要か、又、自分自身の足で歩き、自分自身の目で見ることの大切さを学んだ、とても有意義な巡検となりました。

（文責 四年 富川 武史）

鎌倉研究部会

どうも今日は鎌倉研究部会です。鎌倉研究部会も旗揚げしてからもう3年が経ちました。これを読んでいる皆さんの中には「えっ、こんな研究部会があったの？」と思っている人もいるでしょう。あったのです。

実はこの研究部会は、始めは古文書研究部会として立上げようと考えていました。そこで故石井進先生に顧問になっていただこうと考え相談しに行ったのです。ところが先生は、「んー、君ね古文書についてやるのは構わないけど、折角この大学で学んでいるのだから鎌倉について研究する部会にしたらどう？」と言われたのです。うちの大学には鎌倉をフィールドとして研究されている先生が多く、また鶴見から鎌倉は遠くなく立地的にも良い、という石井先生のお話でした。

それで鎌倉研究部会が旗揚げされたのです。僕らは「文献・考古・美術・文化財科学等の諸

分野から中世都市鎌倉を研究し、その姿を明らかにして行く」という目標のもと最初の1・2年は活動してきました。先生方と一緒に鎌倉を歩き色々なものを見て学んで来ました。しかし残念なことにそれら学んできたことをなにか文字に残したり、発表の場を設けることすらせず、貴重な体験を皆に伝えることなく“自分の良き思い出”として封印してしまったのです。これでは鎌倉研究部会が何をやっているのかわかる訳も無く、後進が育つ訳もありません。

学会は各研究部会の活動にかかっていると思います。入りたい部会が無ければ創ればいいんです。僕らが為し得なかった活発な研究部会活動を皆さんの手で実現させてください。

（文責 四年 松吉 大樹）

精神文化研究部会

13年度は曼陀羅をテーマにして研究を行いました。対象としたのは、私達に印象が強く残っていた金剛界曼陀羅です。この誕生から現在のかたちで完成されるまで、その役割なども調べましたが、今回の主軸は、曼陀羅そのものでした。各部の世界、その配置の意味、それぞれの仏のちからと背景など、様々なことをあらためてみていきました。この研究結果は、文化財学科のウェブサイト内にある研究部会のページからリンクして発表しようと思います。

呪術や魔術、占術、鬼、物怪、幽霊などは、今では「ありえないもの」となり私達の日常生活に深く関わることはなくなりました。しかし、まだ闇がそのままにあった頃、これらは「存在するもの」として人々に強い影響をあたえていたのです。精神文化研究部会は、過去の人々の精神がつくりだしたすべてのものを研究対象とします。興味のある方はぜひ参加してください。詳細は、上記したページと掲示板にてお知らせします。

（文責 三年 唐澤 陽子）

博物館研究部会

博物館研究部会は年3回の活動を行いました。5月に江戸東京博物館へ、6月に毎年恒例となりつつあります東京大学史料編纂所へ、そして10月にタバコと塩の博物館へと見学しに行きました。

今年はただ見学するだけでなく、メンバーに

どこの博物館へ行きたいか、どんな研究をしたいかなどアンケートをとって、それから見学や勉強会をしたいと考えています。この部会に参加して博物館に対する考えや視野を広げてみませんか？専門知識はいりません。博物館について勉強してみたい人、興味のある人、色々な人と交流を持ちたい人もOKです。

研究部会は他の学年の人との交流を深める場所の一つだと思うので、是非参加してみてください。みんなで研究部会を盛り上げて行きましょう。
(文責 三年 宇田川 雅美)

歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は主に中世という時代について、考古学、文献史学、またはその他の関連諸学を区別することなく、その歴史についてあらゆる方面からの研究を目指して活動しています。鶴見大学の文化財学科の理念は、考古学、文献史学、保存科学といった様々な分野を統合して、歴史を研究していくことです。私たちの部会はまさにその理念に基づいた研究活動を目的としています。具体的には、現地巡検を主な活動としており、巡検に行く前に簡単な説明会を兼ねた勉強会を開いて、より現地巡検が充実したものになるように努めています。

昨年は千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館を訪れたり、また鎌倉の大仏坂切通しや大三輪先生をお招きしてのやぐら巡りを開催しました。巡検の終了後は先生を交えての反省会(飲み会)を行った時もありました。このように楽しく、また有意義な部会を毎回行っています。

みなさんは鶴見大学の文化財学科に入る時、何らかの目的、目標を持って入学してきたことでしょうか。その目的、目標を実現する手段としてぜひ歴史考古学研究部会を利用してみませんか。同じ志を持った仲間と話をしたり、先生と直接話をさせていただいたりすることはきっとみなさんにとっていい刺激となり、学生生活が充実したものになるでしょう。鶴見大学の文化財学科、文化財学会ともにまだ発展途上の段階です。是非みなさんで後世に伝わる伝統を歴史考古学研究部会でつくってみませんか。みなさんの参加を心よりお待ちしております。

(文責 三年 阿部 潤)



【文化財学科のホームページ開設】

この度、文化財学科のサイトをつくりました。授業・ゼミの紹介、学会からの連絡、各研究部会のページなどを公開しています。鶴見大学のホームページからリンクしています。在校生はもとより、卒業生の皆様も文化財学会の活動の確認のため、是非、御利用ください。卒業生の住所変更等の御連絡もこちらで受け付けます。

【卒業生会員について】

文化財学会は、本年度いよいよ卒業生を送り出すこととなりました。そこで鶴見大学を巣立ち、各地で活躍する卒業生の情報交換の、親睦の場、在校生との交流の場として活用していただきたく、文化財学会では卒業生会員の制度を設けたいと思います。

会員になるためには、卒業時に会員の登録を行い、合わせて5年間の会費、5千円を納入して頂きます。5年間、会員の皆様には、総会・講演会・シンポジウム等のイベント情報、会報、さらに将来は会誌等を郵送いたします。6年目からは、年会費を振り込んでいただきますが、もし手違いで未納の場合も3年間は、情報の提供をいたします。3年間、会費未納の場合は継続の意志がないものとして、自動的に退会の手続きをらせて頂きます。

また、住所変更等につきましては、学会宛に御一報下さい。この変更は、文化財学科のホームページ上でも受け付けます。

なお、詳細は、内規を定めて来年度の総会で承認を得る予定ですので御了承下さい。

卒業生の皆様の御入会と、今後文化財学会を広くサポートしていただけることを御願い申し上げます。

3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活性化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦はかることを目的とする。
 4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
 5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表
 - 2 講演会の開催
 - 3 会誌・会報等の編集発行
 - 4 親睦その他の事業
 6. 本会に次の役員を置く。
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
 7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに当てる。
 8. 本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。
- 付 平成11年10月16日から発足する。

平成14年度の年間行事予定

- 6月1日（土）
文化財学会総会（春季）午後1時から
文化財学会講演 午後2時30分から午後4時
- 11月16日（土）
文化財学会（秋季）午前11時から
シンポジウム、その他

編集後記

私が文化財学会の委員になって、強く感じたことは、自分の未熟さでした。先輩の方々の経験の数、知識の広さは、話し合いや学会の運営に全て反映されていました。このような光景を目の当たりにした時、1年だからという甘えを抜きにして、自分の無力さを痛感しました。しかし、私は学会の委員になれてよかったです。逆に、先輩たちが良い刺激となり、自分たちでできることを探すことを覚えたからです。先輩たちのようにはいかないけれど、少しでも多く、学会での仕事を覚えていけたらと思っています。

学会は、文化財学科をより魅力的にするために話し合う集まりです。これからは、学会委員だけでなく、文化財学科の一人一人の積極的な意見が必要だと思います。（編集委員）

鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。